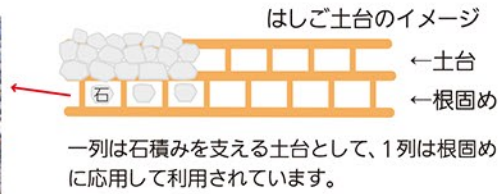
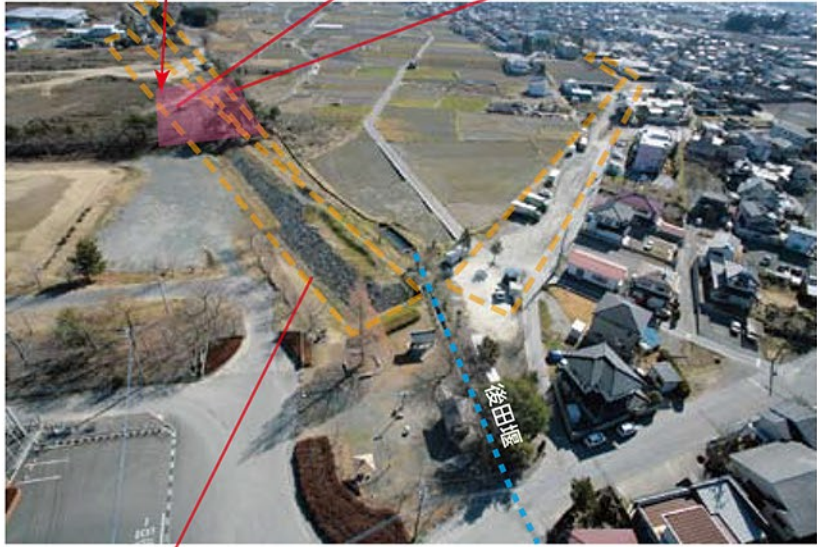


# ふるさとの 其の36 誇り

発掘調査によって新たに発見された「一番堤」と「二番堤」。  
この範囲が平成21年2月12日付けで国史跡に追加指定されました。



国史跡の指定名称は「御勅使川旧堤防(将棋頭・石積出)」です。  
有野の石積出〜三番堤と六科将棋頭および葦崎市の将棋頭が一括で指定されています。

た。「はしご土台」は城の石垣を作る際にも利用された江戸時代から続く技術で、将棋頭にもこの伝統的な技術が用いられたのです。

全国には1,674件を数える国指定史跡がありますが(平成21年8月1日現在)、河川堤防で指定されているのは将棋頭を含め宇治川太閤堤跡など3件のみです。この数字からも将棋頭が日本を代表する治水施設であると言えるでしょう。

将棋頭は、昭和に入り行われた御勅使川の床固工事によってその役割を終えます。しかし今なお残るその姿は、水害に備えた先人の知恵と技術を伝え、日ごと忘れがちな防災への意識を私たちに語りかけているように思えます。



徳島堰の水で育まれ、将棋頭に守られてきた水田風景



六科将棋頭と徳島堰

今年も集中豪雨による被害が日本各地から聞こえてきます。御勅使川も古くから暴れ川として知られ、山の荒廃が進んだ明治時代には洪水を頻繁に引き起こしました。今回の広報では、繰り返されてきた御勅使川の洪水から多くの人々の生活や田畑を守り続けた石積みの堤防「六科将棋頭」をご紹介します。

## 築堤時期と役割

六科将棋頭は、前回ご紹介した枳形堤防の downstream、有野と六科のちょうど境界に位置しています。言い伝えでは、武田信玄が築堤し御勅使川の流れを分けたことになっていますが、最初に造られたのがいつ頃なのかはまだわかっていません。その本来の役割は、徳島堰の枳形堤防が守る取水口から将棋頭の堤の内側に水を引いて作った旧六科村の水田とその下流の村々を守ることにあったと

われ、このことから、少なくとも徳島堰が完成した17世紀後半には耕地を守る堤防があったと考えられます。将棋頭は治水だけでなく、徳島堰の利水にも深く関係した堤防なのです。

## 将棋頭の土木技術

明治時代の文書をひもとくと、現在の将棋頭は、明治32年に改築されたものであることやそれ以前にも明治時代に頻発する洪水によって幾度となく改修されてきた様子がわかります。平成19年度に実施した試掘確認調査では、現在史跡に指定されている堤防は「一番」「二番」と呼ばれる2本の堤防からなり、この二重の構えによって耕地が守られていることが明らかになりました。また土台と根固めには、積んだ石が不ぞろいに沈んでしまうことを防ぐための「はしご土台」が利用されていることもわかりまし

※1 根固め 堤防の基底部を守る施設。  
※2 はしご土台 はしご状に木を組んで石積みの土台とする技法。